

令和2年度 第1回 芦屋市青少年問題協議会 会議録

日時	令和2年 7月29日(水) 午後2時～4時
場所	芦屋市役所北館4階 教育委員会室
出席者	会長 渡部 昭男 (大阪成蹊大学 特別招聘教授) 副会長 山下 晃一 (神戸大学大学院 准教授) 〃 竹内 安幸 (芦屋市自治会連合会 監査) 〃 守上 三奈子 (芦屋市子ども会連絡協議会 会長) 〃 中野 智子 (芦屋市PTA協議会 副会長) 〃 入江 祝栄 (芦屋市青少年育成愛護委員会 会長) 〃 中谷 洋美 (市民公募委員) 〃 田中 徹 (芦屋市教育委員会 社会教育部長) 欠席 進藤 昌子 (芦屋市保護司会 会長) 〃 山田 佐知 (芦屋市民生児童委員協議会 主任児童委員) 〃 井阪 純一 (芦屋警察署 生活安全課長) 〃 北尾 文孝 (芦屋市立潮見中学校 校長) 報告者 若者相談センター「アサガオ」スーパーバイザー 富岡 澄夫 氏 事務局 教育長 福岡 憲助 青少年愛護センター所長 近田 真 青少年愛護センター所長代理 花尾 廣隆 青少年愛護センター課員 松岡 秀和
事務局	青少年愛護センター
会議の公開	■公開
傍聴者数	0人

1 会議次第

(1) 委嘱式

開会挨拶 教育長 福岡 憲助

会長, 副会長選出

(2) 議事

① 芦屋市第2期子ども・若者計画について

② 若者相談センター「アサガオ」について

「アサガオ」スーパーバイザー 富岡 澄夫 氏

③ 今後の方向性について

④ 意見交換

⑤ その他

(3) 閉会

2 配布資料

- (1) 令和2年度第1回芦屋市青少年問題協議会 次第
- (2) 第2期 芦屋市子ども・若者計画 冊子及び概版
- (3) 若者相談センター「アサガオ」リーフレット，セミナーの御案内

3 審議経過（概要）

(事務局花尾) みなさん，こんにちは。本日はご多忙のところ，「令和2年度第1回芦屋市青少年問題協議会」にご出席いただきありがとうございます。私は議事に入るまでの進行をさせていただきます，青少年愛護センターの花尾でございます。よろしくお願いいたします。今回は，勇退や人事異動などがございましたので最初に委員さんの委嘱式を行いたいと思います。コロナ禍の為，新しい委員さんの机上に委嘱状をおかさせていただいております。今回新しく委員になられた方の紹介をさせていただきます。学識経験者として神戸大学の山下 晃一准教授が就任されております。芦屋市立潮見中学校の北尾 文孝校長，芦屋市PTA協議会副会長 中野 智子さんが就任されました。本日の欠席委員は進藤委員，山田委員，井阪委員，北尾委員です。なお，この協議会は地方青少年問題協議会法及び芦屋市青少年問題協議会条例に基づき開催するものです。また，この会議も定足数は芦屋市青少年問題協議会条例第6条により委員の半数となっております。本日の出席数は12名中8名です，半数を超えていますので本議会が成立していることをご報告します。

開会の挨拶を，福岡教育長より申し上げます。

【教育長開会挨拶】

(事務局花尾) ありがとうございます。次に会長の選出です。

【会長，副会長の選出】

会長に渡部 昭男委員，副会長に山下 晃一委員を選任。

(事務局花尾) それでは，渡部会長ご挨拶を申し上げます。

(渡部会長) 神戸大学をこの春定年になり，大阪成蹊大学に就任しております。よろしくお願いいたします。引き続いて芦屋のことで，お役に立てたらと思っております。今日，貴景勝が勝ち越しを決めるかどうか，気になるところです。どうぞよろしくお願いいたします。

(事務局花尾) ありがとうございます。引き続き，各委員さんの自己紹介をお願いします。時計回りをお願いします。

【委員，報告者自己紹介】

(事務局花尾) どうもありがとうございました。次に協議会の進め方について説明させていただきます。芦屋市情報公開条例第19条の規定に基づきこの協議会を原則、公にしたいと思えます。なお、非公開情報が含まれる場合や公開することにより公正または円滑な審議ができない場合は非公開とすることができます。その際には、ご発言の前にお申し出ください。

また、会議の発言内容につきましては録音させていただきます。委員の皆様には後日確認をさせていただきます会議録として芦屋市公式ホームページに掲載し公開致しますのでご了解をお願いします。

本日は、傍聴者の方はいらっしゃいません。

それでは、議事に入らせていただきます。ここからは渡部会長、よろしくをお願いします。

(渡部会長) 1ページを開いてください。今回は、新しい委員の方が3名おられますし今年度から第2期の計画が始まります。まず、1番「第2期芦屋市子ども・若者計画」について、事務局からご説明をお願いします。

(事務局花尾) 「第2期 芦屋市子ども・若者計画」の説明をする。

(渡部会長) どうもありがとうございます。冊子の21ページを開いてください。⑥に「芦屋市では若者相談センター『アサガオ』という不登校・ひきこもり・ニート等に関する相談所がありますが、知っていますか」の項目で、全く知らないが97.1パーセントとなっております。今日は、若者相談センター「アサガオ」の富岡先生に日頃の活動などをお聞きしたいと思います。富岡先生よろしくをお願いします。

(富岡氏) はい、わかりました。ご存知でない方もいらっしゃると思えますので、少し全体の流れとしてお話させていただきたいと思えます。社会福祉法人「芦屋メンタルサポートセンター」が芦屋市教育委員会の委託業務として相談センター「アサガオ」を2013年に設置しました。実際稼働したのは2013年10月からです。電話相談と面接相談を中心しております。半年間は延べ人数が68名という形でした。周知については徹底されていませんでしたが、同時に2013年に、コミュニケーション力をつけるという形で2月、3月と連続セミナーを合計2回しました。そういう啓発活動も踏まえながら、2年目の2014年には、延べ人数も68名から227名に、2015年には延べ人数326名へと増えていきました。特に、2016年には実人数が296名で延べ人数が770名となり、2015年から比べると2倍以上になりました。なぜ、これだけ増えたのか、どのような形で周知されたのかと申しますと、知人からの情報、いわゆる人づてです。「アサガオ」の紹介はそこから始まりだしました。やはり、不登校やひきこもりのお子さんをお持ちのご家庭は、実はわらをもすがる思いで相談に来られます。このようなところから、芦屋だけでなく、神戸市、西宮市、宝塚市、尼崎市という幅広いところからも相談に来られます。ただ、このような相談活動というのは住居地が芦屋市ではないからと、断わるわけにはいきません。そういう意味において相談があれば、電話相談、または面接相談もします。それ

が、急激に増えてきたのは2016年からです。2016年から2017年になりますと延べ人数が865名で実人数が417名、2018年になりますと1,000人越え、延べ人数1,043名で実人数は394名で、2019年は延べ人数1015名、実人数が435名でした、不登校・ひきこもりの子どもたちといっても、ひきこもりの場合は大学生から始まり全然変化がみられないまま40代を迎えている場合もあります。当然ながら不登校の子どもがこの中で高等学校、大学に進学をして就職するという例もありますが、やはり新しい子どもたちがどんどん入ってきているのが、今の現状です。そこで特に、ひきこもり、不登校の親御さんが非常に大変だという事で“親の会”というものを開催することにしました。この会はたくさん相談件数が増えた頃、2017年からスタートしており、4年間続いております。不登校、ひきこもりの子どもを持つ親の会という形で中学生の親御さん、高等学校の親御さん、大学生の親御さん、一般の社会人の親御さんが、集まって横のつながりでお互いに話をしようという集まりです。もちろん、その会から卒業なさった方もおられます。卒業なさった方は、今悩みを持っておられるお父さん、お母さんにアドバイスをしに来てくださることもあります。月に1回、開催しています。親の会の御案内は広く皆さんに公開することは遠慮しております。相談に来られた親御さんに「このような親御さんがいらっしゃいますよ」という形で紹介しています。不登校、ひきこもりの方の中には発達に課題を持つ発達障がいの方が少なくありません。先日は特別支援教育士の方で、ピアサポートの認定コーディネーターである方にボランティアで来ていただきまして、発達障がいに関して、お父さん、お母さんたちに向けての講話の会をしました。それが、“アサガオ”親の会”です。もう一つ、子どもたちをつなげることはできないかという事で、“ピアサポート”をめざした子どもたちの集る会をしております。それが、“キ・テ・ミ・ル・会”です。中学校、高等学校、大学生、一般の方たちがお互いに話し合う、若者たちの中での悩みとかを話すものです。2016年からスタートしましたが、なかなか増えません。先日、初めて10人を越えたのですが、なかなか難しいです。今後の課題は“キ・テ・ミ・ル・会”を充実させて、少しでも若者同士のつながりを持たせていこうと考えております。中学生が悩んでいたなら、参加した高校生が悩みを乗り越え中学から高校に進学したという話を聞き、高校に進学、高校生が悩んでいたなら参加した大学生の成功した話や姿を見ながら、進路を見つけるというのを目標に会を作ったのですが、こちらの活動は少し停滞気味になっております。また、今お配りしています「アサガオ」主催の連続セミナーですが、毎回25名～35名ぐらいの方が参加しています。毎年、不登校、ひきこもりについての内容ですとだいたい35、6名の方が来られます。今年は新型コロナウイルス感染防止の為もあり、制限しましたので、23名の参加でしたが、来られた方は必ず面談を希望されます。こんなふうに親御さんたちは大変です。来られた方にはどのような形で来られましたかというアンケートを取っているのですが、参加者は知人からの紹介、もしくは以前参加した方にはこちらから案内の葉書を送っていま

すので、葉書を見て来ましたという方、ほかに芦屋市の広報紙を見て来ましたという方もおられますが、そのような方は毎回2, 3人です。ですから、「アサガオ」の広報活動はこれからの課題になると思いますが、「アサガオ」に相談に来られるのは知人からの紹介、あるいは、改善されたお子さんをお持ちの親御さんからの紹介、今相談が継続中ではあるが、相談に十分ご満足いただけている方といわれる方からの紹介も多々あります。先ほどの21ページのアンケートでの「アサガオ」の認知度に関しましては、「アサガオ」を必要としているか、必要としていないかの差であって、相談を必要としている方にとっては実際、このような形で1,000名を超えるのですが、必要としていない方にとってはこの数字は何なのかということにもなるのではと思っております。そのように言いますのは、私が教育相談を行っておりますいくつかの高等学校で、年間計270～350回程の親御さんや高校生本人たちにカウンセリングをしておりますが、全員に周知徹底しないといけませんが、私が相談で来校していることをその高等学校の全教職員や他の在校生は知らない場合もあります。相談を必要としている先生方はよくご存知ですが、相談を必要としなければ私の名前も、相談をしていることも知らないという温度差もあります。そういう意味でもコミュニケーションスキルを高めるセミナーを芦屋市でさせて頂いていますことで、啓蒙活動も含めて「アサガオ」の認知が広がっていけばいいと思っております。また、アウトリーチですが、必要とされた場合はしております。実際アウトリーチは2015年からしておりますが、2015年は6件、2016年5件、2017年3件、2018年は3件としております。ただこのアウトリーチは、行き先はご自宅ではないのです。何故かと申しますと、『アサガオ』に相談したいが、『アサガオ』には来れないし、お家には来てほしくない。外で会いたい」ということを何人もの方がおっしゃいました。相談員の人数も限られています。お昼休みに芦屋市の体育館の2階の喫茶室でお昼時間にとの申し出があり、勤務時間外でもありますが相談員もかなり無理をします。相談員の人数もありアウトリーチの依頼があってもかなり制限があります。それで今年からは私がアウトリーチの方はしてもいいと考えています。私でしたら、比較的、余裕があります。この間も大学生の親御さんが相談に来られたとき、アウトリーチで「お家に行きますよ」と申し出ると、「家には来てほしくない。子どもは出て来れないので。どうしましょう」と話され今は調整中です。こういうケースが多々ありますので、アウトリーチというのはなかなか難しいものだと思います。福祉関係に関しましては、メンタルサポートセンターにこちらから引継ぎをします。できる限り、福祉に関しては交通整理ができるようにしていきます。教育問題に関しては学校、ご家族とも連携していけるようにしていきたいと思っております。今年は広報も一生懸命して頂けるといことを伺っていますので、できる限り子どもたちにとっていいようにしていきたいと思っております。なお、当方に不登校の相談に来る子どもたちは“適応教室”には行っておりません。“適応教室”に行けない子どもたちです。ですから適応教室にも行かれるようにお話させてもらっています。又、

学校にも行けるようにお話しています。それに昨年から、電話相談の時間を1時間、面談は月2回と決めさせてもらっています。より多くの方にご利用いただけるように設定いたしました。

(渡部会長) どうもありがとうございました。この冊子9ページを開いてください。不登校の数字が、平成26年から平成30年までの小学校、中学校と掲載されています。少しずつ増えてきています。芦屋市の平成30年度の小学校、中学校と数字がでています。その下に適応教室の在籍者数がでていて、20人前後から30人となっています。冊子の3ページの第1章の計画の対象の箇所を開いてください。乳幼児期、学童期、思春期、青年期、ポスト青年期となっています。このような年齢の幅がわかります。冊子の75ページを開いてください。第1期芦屋市子ども・若者計画 取り組みの評価ですが、5年間の評価がでております。78ページを開いてください。事業名77番 子ども・若者への訪問支援(アウトリーチ)の評価です。「アサガオ」の部屋でお待ちして、電話相談・面談することに加えて、出かけて行って相談を受けるというアウトリーチですが、第1期ではC評価となっております。第2期はどうしますかという課題もあります。議事(1)、(2)の説明は終わりましたが、どうぞ、質問等自由に出してください。・・・入江さん、「アサガオ」の認知度が低かったのですが、いかがですか。

(入江委員) 中学校でしたら、このようなパンフレットを配布する機会がありますが例えば高校だと市外に出てしまう事もあります。なかなか、「アサガオ」のことは目にする機会がないので広報紙とかでもっと広く周知してもらえたらいいと思います。若い人はネットを使うので、ネット利用するのもいいと思いますが、どのようにしたらいいかはわからないのです。私達、育成愛護委員は「アサガオ」のことは知っています。私自身の娘も一時的に不登校になったりしたことがあります。その時は高校の先生がかなりサポートしてくださり、無事に卒業できたのですが、西宮市の学校でしたので、その学校の中でカウンセリングを受けたり、病院を紹介してくださったりして助かりましたが、学校を卒業してしまった人は、どうしたらいいのでしょうか。卒業してから、なってしまった人とかはどうしたらいいのでしょうか。

(渡部会長) 富岡先生、むしろ「アサガオ」が関わっている年齢は学齢期よりも、もっと後の年代なのですか。

(富岡氏) そうですね。基本的には、小中学校は教育委員会の適応教室というのがございますね。高等学校に入りますとそういう形のものがないのです。

そこで、一応は15歳以上で青年というかたちで35歳までの不登校・ひきこもりを対象とした相談業務をしておりますが、現実には中学生も相談に来ています。親御さんが来ておられますが、中学校の方は、できるだけ適応教室にと、こちらの方からお勧めしたりしております。場合によっては、学校との連絡ということもございますが、なかなか、そのあたりは難しいです。高等学校の場合でしたら、芦屋市に住んでいても学校が私立の場合は他市に通学したりしています。高校も県立と私立は教育のシステムが違います。そういうところで親御さんは詳しいところで相談をしたいと言われます。うちの相談員は教職経験者がおります

のでそういう対応はできます。そういう意味で大学と大学を卒業した後、社会でうまくいかなかったという子どもたちの対応はできますが、なかなかひきこもりとなってきますとね。この間、私がひきこもりの話をしていましたら、親御さんが30代のお子さんを連れて来られていました。私の話をきいて、そのお子さんの感想が「なるほど、私は十分ひきこもりだということがよくわかりました」と言って帰りました。その後、どうするのだという話であればカウンセリングをしますし、ほかの期間の紹介とかもしますが、続かないですね。そのようになると長い時間かかるようになるでしょう。できる限り就労支援をしていきたいと思って、いろんなお話をしていくのですが、なかなか難しいですね。親御さんたちをひっぱっていくよりも、親御さんたちのしんどさをサポートしていくということにもかなりウエートがかかっているのですね。なかなか、親御さんが他に相談する場所や機会がないのですね。例えば、上手く学校の先生とマッチ出来たらいいのですが、高等学校は欠時数の問題や進路変更の話とかになってきますので、やはり親御さんは苦しいですね。ですから、芦屋市でありながら西宮市や宝塚市、尼崎市、神戸市からの相談があるというのは、相談の窓口が少ないのか、気づかないのか、そういうところで自分が知っているところに相談に行くということになっていくのです。そういう意味では人から人に伝わっていくことはやはり大きいと思います。私はよく「神戸市に相談窓口があるのではないですか」と話すのですが、「知りません」と言われます。ですが、神戸市も相談業務をしているのです。中学校は相談案内カードを配ってもらっています。県立高校でも相談機関の案内は配るのですが、私はかつて高校の教員だったからわかるのですが、必要な人は持って帰ったりしていますが、たいがいは捨てています。ただ、どこかで記憶してもらっていたら、必要な時に役に立つのです。ですから、私個人は、相談案内のカードはどんどん配っていただくことはいいと思います。なかなか子どもに繋がっていくのは難しいかもしれませんが、配っていただくのは大事な事だと思います。

(渡部会長) 新しく委員になられた中野さん、「アサガオ」のこと、どうですか。

(中野委員) 先日中学生の息子が「アサガオ」の相談案内カードをもらってきたのですが、私自身は、愛護委員のほうで知っていたのです。子どもは関心をしめさなかったのですが、私は以前から知っている「アサガオ」さんだと思って見ました。「キ・テ・ミ・ル・会」が、子どもたちの会で、子どもを自立させていくという会とお聞きしたのですが、今現在の「キ・テ・ミ・ル・会」の現状はどのようなものなのですか。

(富岡氏) ほとんどがたわいない話をしています。ただ、そこで悩みがあったら話がでます。年代は違いますが、その悩みに興味があったらみんなで話し合うことになりませんが、大学生がいたら結構話が弾みます。勉強会という形も考えましたが、ただ、勉強という形をとるのは、越権行為だと思っていますし、参加者も減っていく方向になると思います。本当はそこで勉強を教えることがあってもいいのですが、小・中学校の場合は適応教室もあり、担当エリアはきっちり分けないということもあり、今は授業をしっかり受けさせようという話に進んでいます。勉強についてはボランティアや学校を退職された先生方が「いつでも、

手伝いますよ」という申し出はありますが、「はい。そうですか。お願いします」とは言えないのです。激励や勉強の仕方は話せますが、学校に繋げるということが「アサガオ」の本来の役割なので、それ以上の事はしないのです。

(渡部会長) 市民委員の中谷さん、お願いします。

(中谷委員) 「キ・テ・ミ・ル・会」に参加するお子さんは、不登校のお子さん対象ですか。いろんなお子さんが参加して楽しかったと思えるのはいいですね。不登校のお子さんは、人の中に入ることが出来たら不登校になりませんよね。親御さんは、自分の子どもが不登校だということを隠したいとか、お子さん自身、自分が学校に行けていないことを内緒にしたいというところがあって、なかなか「アサガオ」に足が向かないのかと思ったりもします。広報の仕方として、私は他市から引っ越ししてきたのですが、芦屋市のことを知るために広報紙を見ていました。その時に「アサガオ」があることを知りました。「アサガオ」が知られていないということを去年も言われていたと思いますが、その際に、青少年問題協議会で広報を読めば「アサガオ」のことがわかるというお話だったと思います。今年の広報は、ずいぶん広告的になっていたので見やすかったと思います。以前は新聞の折り込みに入っていました。全戸に必ず1部配達されていますので、市民がそれに目を向けるという目標があればいいと思います。

(渡部会長) ありがとうございます。守上さん、なにかございますか。

(守上委員) 別の団体で「アサガオ」の職員の方に来ていただいてお話をして頂いたことがあります。3組の市民の方がチラシをご覧になり相談に行かれたとお聞きしましたが、ご自分のお子さんが問題を抱えてられたようで、後で相談に行かれたようですが、最初にご本人ではなくてご家族の方が相談に行かれたとのこと。学校でこのチラシを配布して、子どもがそのチラシを見て問題意識を持つことがあるのでしょうか。

(富岡氏) まず、ないですね。学校に行っている子は人間関係で悩んでいる子というのは中学校でしたら、ほとんどスクールカウンセラーが学校にいます。学校の先生にも相談できます。時々、学校に言えないという場合もありますが、ほとんどの場合は学校に行けていない子どもたちです。“キ・テ・ミ・ル・会”に来ていた子でようやく他の子と繋がれるようになった子どもたちもいるわけです。お父さん、お母さんとだけで繋がっているのに少し他の所と繋がってみようかというところに来る子もいます。どうしても同じような人がいる方が集まりやすいのです。そこに、違う子どもたちが入ってきて、ワイワイガヤガヤできたら一番いいのですが、そこに至るまでの段階で「キ・テ・ミ・ル・会」があるのです。個別では話ができるけれども他の人と話しができるかということ、そこまではまだできないという子どももたくさんいます。中学生は、早く学校現場に返してやりたい、戻してやりたいと思っています。なかなかそれが難しいところなのです。高等学校の場合は欠時数で進路変更もありますので、そのような話もどんどんしていかないといけないのです。大学に行けなくなった子も出てきていますので、そういう若者たちに対しても同じようなことを丁寧にしていかないといけないのですが、そのような場があればいいのですが、なかなか

難しいです。社会人になりましたら余計に難しくなります。親御さんたちはどこまでが自分たちが望んでいることなのかに悩まれることもあります。その中で大学を卒業して結構仕事についているお子さんもおられるのですよ。ですが、親御さんから見たらそれは仕事ではないというふうに親子の温度差のようなものがあります。そこのところは親御さんとも話をしていけないといけないと思っています。それで、相談内容や対象の幅が広がっています。場合によると医療機関のご紹介も勧めていっています。まあ、不登校とひきこもりの若者が中心になっています。

(渡部会長) ありがとうございます。竹内さん、お願いします。

(竹内委員) 冊子の21ページに「アサガオ」の認知度が非常に少ないとなっておりますが、私もこの青少年問題協議会に出るまでは、「アサガオ」のことは全く知りませんでした。このネーミングは本当に素晴らしいと思います。家にアサガオの花を植えていますが、子どもたちから「あさがお、きれいだね。」と言われるので、子どもたちに芦屋の相談窓口の「アサガオ」を知っているかを聞きましたが、知らないとの答えが返ってきました。そこで、提案ですが、「アサガオ」の認知度を高める為に広報紙に「アサガオ」の特集を年に1回か、2回か一面の全面に出してはいかがでしょうか。今まで、「アサガオ」をご存知ですか？」とか出されていますか？シルバー人材センターとかで全戸配布もされていますし、広報にはどの程度掲載されていますか。

(事務局花尾) 若者相談センター「アサガオ」についての広報活動は、ホームページや広報誌で事業の案内を配信。それと、成人式で「アサガオ」のパンフレットを配布、中学3年生には、卒業時に「アサガオ」も含めた、相談機関啓発用のカードを配布しています。なお、芦屋市生徒指導連絡協議会での周知や各種会議でPRして啓発をしております。

(竹内委員) ぜひ、一度、相談窓口はここです。というふうに年に1回でも2回でも「アサガオ」の説明、電話番号等を改めて広報誌に掲載するといいいのではと提案します。それと、もう一つ私は地域で自治会の相談窓口をしておりますが、「自治会費を集めるだけではだめです。何のための自治会があるのですか」ということで自治会の役割を明確にしていこうとなり、自治会の構成員を地域の子ども会、PTA、民生委員、地域委員、商店街といった5つの部会を作り、部会の中で地域の相談窓口を作りました。近所に知られたくない内容もありますが、人に話すことで悩みが8割解決する場合があります。人に話すことで悩みが解決することもありますから、是非、広報で利用してもらったらいと思います。中には自治会が相談窓口になることに、反論もありますが、そこから地域を知ることが出来るのです。年会費を頂いていますので、年3、4回の回覧板を作りましたら結構問い合わせがあります。相談の日時、場所をお知らせしています。地域の人が相談をとおして、いい雰囲気になり、商店街の会長さんもいろんな相談があるとされます。また、商店街のお客さんが増えたとも言われます。地

域とのつながりは大事だと感じています。何かのヒントにさせていただければと思います。

(渡部会長) ありがとうございます。回覧板は、各地区で何所帯・何班くらいですか。例えば「アサガオ」を紹介した文書をはさみ込んで回していくということですかね。

(竹内委員) 私の所は、585所帯くらいです。本当は700所帯くらいなのですが、マンションとかありますが、防災ということをお伝えするとね、自治会にきちんと入ってくれるようになりました。地域が一体とならないと防災活動はできないのです。自治会で33班あります。そこで33班の班長さんが、3カ月に1回で回覧板を回そうということになり回覧の編集委員会を開いています。回覧板で結構良い環境になりました。回覧板というのは必ず1軒ずつまわりますね。「こんにちは」とか「元気ですか?」とか会話ができて、いいですね。回覧板を回していくのです。そうやって地域の皆さんと繋がるように少しずつやってきています。それで、いい雰囲気になってきましたね。

(渡部会長) ありがとうございます。山下先生初めて計画の方もご覧になっていかがですか。

(山下副会長) 計画はまだわかっていなくて、もう少し解説していかないといけないのかと思うのですが、「アサガオ」の件についてはよく頑張っておられるなという印象です。ですから、認知度そのものが目標になるのは少し不本意な気持ちだと思って、他のところで適正な評価がないかということが1点です。もう一点が、これはなかなか難しいところなのですが、新型コロナウイルス流行の中で社会の在り方もだいぶ変わってくるかという気がしています。不登校の子どもに登校支援していることに矛盾が生じてきて難しく、学校に早く返してあげたい、行けるようにしてあげたいのですが、どうしたらいいかわからない、学校にいけない原因もわからない、本人もわからない、これはコロナの問題もあるので「学校に行かなくても大丈夫だよ」というケースについても少し、知ってもらおうというか、周りは無責任になりすぎるところもあるのですが、その中で学校に行かないといけないと思いつくという矛盾もあるので、行かなくても大丈夫かなという、少し何かの形で見えていけばいいのですが、無理をするのはやめておこうかという緩やかな感じに社会全体がなっていくのではないかと予想されるので、それを先取りできるようなことがあればいいと思いました。昔であれば少子高齢化でない時は、親御さんがそんなに長い間お子さんの面倒をみておられないので自然にお尻に火がついていたのです。現代ならではですね。本当は、当事者の方もそうなのですが、当事者でないと思っている方達にこそ考えてもらえるような子ども相談ですね。3つめには「アサガオ」の広報とかで周知をするときに「困っている方が利用してくださいね」と言えますが、今、困っていない方でも「困ったときは利用してくださいね」と、また、全く使わない人もおられる、そういう人たちには一体この「アサガオ」をどのように見て欲しいのかということですが、例えば、暖かく見守って欲しいというのか、学校に行けない子がいるのをきちんと受けとめて一人一人の問題として考えて頂けたら嬉し

いです。一見、関係のない人にはどのようなメッセージを発信すればいいのかが大事なのかという気がしました。

(渡部会長) ありがとうございます。議論を深める意味で少し整理したいと思います。保護司の進藤さんが本日はお休みなのですが、民生委員さんや、愛護委員さんが「あのお家でどうもひきこもりの方がいるらしいよ」という話で繋がっていくケースが意外とあり、市民全体の認知度はむしろ上がらなくても、キーパーソンとなり繋げてくれる人に「アサガオ」を知ってもらえているかどうか重要ではないかという気がします。キーパーソンとなる人にどんな状況だったら「アサガオ」に一声かけて欲しいとか、連絡がほしいとか、分かっておいていただく。伝えたいのだが、おせっかいかもしれない、こんなケースもしかしたら自分が思っているだけで本人が希望しているわけでもないから、そっとしておいてあげた方がいいのかな、どうしたらいいのだろう、と迷ってしまいますね。例えば近所にひきこもりの方や困っている方がいるらしいということに気づいている人たちが、どのようなアクションをしたらいいのか、そのアクションの相手先として「アサガオ」を認知してもらうにはどうしたらいいのか。

ところで、前回の会議の際にアウトリーチのことが話題になった際に、アウトリーチの専門性とカウンセリングの専門性とは少し違うところがあり、単にアウトリーチの頻度を多くすればいいのか、アウトリーチの評価の「C」を「A」にすればいいのか。アウトリーチが本当に必要なのかでしょうか。キーパーソンによって、繋がったケースを丁寧に追いかけていくことも大切です。ご報告では年間400～300ぐらいの実数があるわけですね。①支援相談継続しているケースと②他機関に繋いでいるケースと③終了しているケースと、また④新しく入ってくるケースとありますが、アウトリーチに充てる時間があるとすればむしろ別のところに力を注ぐかということたちもありそうな気がします。それでも、やっぱりアウトリーチしましょうということになると、相応のマンパワーが必要です。アウトリーチは、第2期芦屋市子ども・若者計画の事業には上がっていますが、発掘して見つけ出すという本来のアウトリーチとは違うイメージでしたら、訪問相談・訪問支援という用語に変えたらいいのではないかと思います。富岡さん、なにかありますか。

(富岡氏) まず、一つは必要な場合というのは、不登校の子どもが「アサガオ」にも行けない、家から動けない、でも親御さんが来て欲しいと言われるなら、不登校の子どもたちの対応策はできます。ただし、前にお話ししましたが中学生の場合でしたら、学校との連携が必要になるのです。学校を越えて動くのは問題があります。学校がそのことを認めて下さるといえば別ですが、しかしそれには学校のメンツの問題も出てきます。そういうことでは高等学校の場合は動きやすいのですが、中学校の場合はそういう意味で難しいです。そのような動きがクリアできているかどうかです。お子さんによっては夜に来て欲しいと要望があれば、勤務形態自体が変わってきますし、少し問題が複雑になってきます。以前でもアウトリーチは休み時間を利用してというか、

休み時間を使ってという形しかできなかったのです。今回私がアウトリーチに行くということなら時間外でも構いません。どうしても必要か、必要でないかは、相談者相手方の問題なのです。わざわざ、こちらから件数を増やすためにアウトリーチをしましょうというのはしたくありません。相手が必要としていて、そこに行くことによって何らかの形でアクションを起こせるような働きかけ、場合によっては福祉センターの人達と一緒に動かないといけない場合もあるだろうし、サポートステーションのこともでてきますね。どこまで我々ができるのかということかなり範囲が限られてくるのです。限られた部分において、アウトリーチができるかもわかりませんが、それを例えば何件しないといけないかという目標数値があるのは、私は滑稽だと思っています。目標数値がなくてするのなら、アウトリーチをする可能性はあると思います。渡部会長が言われたように限定はされてきます。あまり広げていって、何もかも抱えていくのは少し課題が出てくると思いますね。必要なものに限ると、かなり絞られてくるのではと思います。

(渡部会長) アウトリーチというよりは、訪問の依頼があったときに、出かけて行くということですね。

(富岡氏) そう、訪問ですね。もう一ついわゆる不登校のお子さんも親御さんもやはり情報量が少ないのです。例えば進路にしても、もう少し「いろんな進路があるのだよ」とか。大学を卒業してからのことも知らない。その情報提供を我々はしていきたいと思うのですが、そういう意味ではアウトリーチの可能性もあるかもしれないです。その時に、その後どこに交通整理ができるかという窓口になれる可能性はあるかもしれないですが、来てもらって「いろいろ情報提供させてもらっていますよ」という方がいいのですね。自治会長さんが言われたように、すべての人に「アサガオ」の存在を知ってもらうということよりも困ったときに近所の人から『アサガオ』というのがあるよ』と『アサガオ』の存在を教えてもらう、「電話したら」と声をかけるという、そのような認知度は有り難いと思いますが、必要がなければ見ないし、気にしない、必要になれば、他市の相談窓口でも相談する、という形になってくるのだと思っています。その場合、どのような認知度でどのようにしていくのが一番いいのかなということを考えて頂ければ有難いと思います。

(渡部会長) 少し学校との関係で、冊子の9ページに掲載されているような不登校や適応教室にたいしこれは基本、「学校が対応しますよ」ということでいいでしょうか。「アサガオ」とこんな形で連携を取りたいとかの希望があるのでしょうか。

(田中委員) 適応教室というのは今の枠組みでは学校に戻すというのが一番の目的としています。私は教育委員会の社会教育部で学校教育とは違う立場ですが、適応教室といっても不登校の子どもから見たら学校なのです。学校と同じように行きにくいという思いがあると思うのですが、要するに学校とは無縁の居場所を提供するというのが、私達はあってもいいと思うのですが、どうしても中学生となると学校との繋がりを断ち切れないうところがありますので、本日は中学校の校長先生が来られていなくて残念なのですが、どうにかたち

で、学校と「アサガオ」とが連携できるのかということはこの計画を作った一番初めからずっと未だに解決しきれていないところなのでもし、全国にそんな例があれば事務局に一度調べて頂きたいですし、例がなければ、どういう形、なにか新しい道が探れば良いなと思っていますのですが学校と議論していくしかないのかと思います。今年は愛護センターの所長代理が今年3月まで中学校の校長先生でしたので、そのへんの議論を活発にしていきたいと思っています。

(渡部会長) 基本的には「チーム学校」のような形でスクールカウンセラーを入れたりソーシャルワーカーやケースワーカーを入れたりして、学校の中に複数の職種が増えてチームがつくられつつ、ありますよね。芦屋はどのような感じですか。

(田中委員) 私より、花尾先生の方がお詳しいですね。

(渡部会長) 「チーム学校」でできるなら、「アサガオ」ではなく「チーム学校」に委ねてもいいような感じですか。

(事務局花尾) 3月まで中学校に勤務しておりましたが、学校では不登校等の家庭訪問を計画的に実施するのですが、保護者はもっともっとたくさん来て欲しいという要望もあり、対応ができないことがあります。そういう時には、「アサガオ」へ相談を繋ぐことで、保護者の要望に応えることもできますので、学校としては連携をしながら対応できるかと思っています。問題行動や不登校の子どもたちの指導については、中学校では生徒指導部会というのがあり、週に1回時間内会議を行い問題行動等を含めて不登校の子どもたちへの取り組みの情報交換をし、方向性を定めてチーム学校として取り組みを進めています。会長が言われましたように、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーと連携し事案に対応することや、市内の相談機関と連携しケース会議を開催して対応策を協議しながら指導に当たるケースも増えてきています。

(渡部会長) 「アサガオ」のスタッフは2名か3名でしたね？

(富岡氏) 2名です。そこに私が、コーディネートするという形で入っています。家庭訪問支援という形でしますとどうしても、人的なパワーが足りないですし、まだまだ課題が多いのですね。一人だけで行くというのは、絶対してはいけなくなると、複数で行きます。どうしても必要である時に話をします。今、私が話を聴いている子は大学生で留年をしているので、親御さんは大変なのですが、子どもさんは自分にはカウンセリングは必要ないと。親御さんは必要だと言っても来ていただくことは難しいでしょう「ではどこかでキャリアカウンセリングという形でお話ができたらいいですよ」と言っても、親御さんは子どもさんになかなか言いづらいのです。そうすると、親御さんだけのカウンセリングになるのです。親御さんはいつでも来ます。私に会いたいとご夫婦で揃って来られます。そういう形になりますと、なかなか、アウトリーチという形は言葉としては非常に動きやすいことでいいのですが、いろんところでハードルがでてくるのです。「どんどん、家にきてください」という親御さんがおられると、1回行け

ば、本人をうまく連れ出して学校や他にも外出させることができるかもしれませんが、実際は子どもさんと親御さんの間にかなり温度差があります。子どもさんはあまり必要としていないのに、親御さんの方が焦っておられるということができてきますので、その時に学校はどのように絡んでいくのか、結構難しいところなのです。高等学校も同じです。先ほど言われたようにチーム学校というのは、本当はものすごくいい事なのですが、今度はどこまで第一歩入ってくるのかということになったら、結構学校という枠組みが固まってきますので、余程の事がない限りチーム学校という形では動けないということがでてくるかもしれませんね。

(渡部会長) 「訪問してもらえませんか」という要請が届いたら、出かけていく。アウトリーチという言葉よりも訪問活動を頑張るといったような修正をした方が、誤解がなさそうな気がするのですが、そのへんはどうなのでしょうかね。アウトリーチというのは・・・。

(富岡氏) そうですね。もともと、福祉の言葉ですね。福祉の言葉で教育的な所に持っていくというのはなかなか難しいかもわからないです。ただ、なにか動き出すという形のキーパーソン的な役割だったらどうでしょうか。

(渡部会長) アウトリーチは過去の5年間C評価だったのですよね。このままでしたら、今後の5年間またC評価が危惧されますよね。そこはあるべき姿をきっちり考えて、要請があるところにこまめに丁寧に届けていくようにそれに、見合った言葉に置き換えた方がいいのかと思います。

(富岡氏) 家庭訪問をして、指導・助言という形でしたらね。

(渡部会長) 訪問支援・訪問相談とかですね。入江さん、すべての人に知ってもらおうというよりも、キーパーソンにきちんと知ってもらっていたら、繋がりそうな気がしますね。愛護委員さんについてはどうですかね。

(入江委員) 先ほど、おしゃっていたように、私達愛護委員は216名おります。子ども会や身近なところ、ボランティアをしている方々は周りの方をよく見ておられると思うのです。いい意味で、繋がっているのです。「こういう人がいるのだけど、どうしたらいい?」とか一人でも知っていたら「これ、知っている?」となりますので、そのような団体にお話しをしてはいかがでしょうか。

(渡部会長) 富岡先生が、民生委員や愛護委員さん、保護司さん向けに、いわゆるキーパーソンの人に一度お話をしてもらおうとかはいかがでしょうか。

(富岡氏) お話させてもらっても構いません。ただ、認知ということに関しては、人によって温度差があると思いますので、こだわらないですが、「アサガオ」をできるだけ広げていただけたらいいと思います。「『アサガオ』という相談機関があるよ」と何かの時につかえるということは大事な事だと思います。

(入江委員) 愛護委員は固定ではないので毎年PTAから新しい委員さんがはいつてくるのです。新しい方は新しい情報を持って班集会とかに出て下さるので、委嘱されて半年ぐらいしたら「気になる子どもさんがいる」と、いうお話がでてきたりして、どこにどのようにお話を持っていけばいいのかわからないのです。その情報を持たれた方もわからないのです。きっちりと知識があれば、適切なところにお繋ぎすることができます。それを教育して頂ければありが

たいです。ぼやっとした情報をどのようにすればいいのかわからないのです。ある程度愛護委員の年数を経なければわからないです。

(渡部会長) 愛護委員さんたちで相談して頂いて、日程が決まれば富岡先生と相談して、お話をお聞きする段取りができますか。

(入江委員) 今年は、コロナでどうなるかわかりませんが、愛護委員会では毎年2回研修会を開催しております。中学校区青少年健全育成推進会議との共催の研修会と愛護委員会独自の研修会に来ていただくとか、もしくは、班集会にきていただくとかいろんな方法があります。

(渡部会長) 少し、そのへんお考えいただいて、ご無理のないようにしてください。あと、今回は御欠席ですが、保護司の進藤さんですね。

あと気になったのは400代から300代の実数ですよ。芦屋はどれくらいですか。他市からの数字もはいつていますか。

(富岡氏) そうです。全部入ってしまっています。匿名の場合もありますので。どちらから来られたかを聞かなくても、学校のことがでてきましたらわかります。8割以上は、芦屋の方です。1割五分ぐらいは他市かと思います。芦屋市から他市に進学されている方の相談も1割以上です。私立の名門校といってもお住まいは芦屋、芦屋の中学校、芦屋の小学校を卒業してから行っておられるという方のご相談はあります。

(渡部会長) 「アサガオ」を必要としている実数が、芦屋市で200から300は常時あるのです。どんな感じなのですか。各年度のなかの①継続、②他機関紹介、③終了、④新規、の内訳はわかりますか。

(富岡氏) そのあたりは、実はあまりだしてはいないのですが、残念ながら、いったん終了したつもりでいても例えば、中学校で支援し、無事高校へは進学したけれども、また大学で支援が必要になるというケースがでてきます。先日、「親の会」で、大学でまた、再発している話を聞きました。いったん、途切れても、出てくる場合があります。そのあたりの数字的などころにはあまり詳しくは出していません。

(渡部会長) 「アサガオ」のマンパワーが大変だとお聞きしました。現状では人数的に手がまわらず一杯だということですが。

(富岡氏) 予算のことがあります。そこだと思います。また継続してお電話される方が一時期ありましたので、できるだけ相談は一時間として、時間を区切って行かないとなかなか難しいです。しかし、不登校が続いている子どもを持つ親御さんの中には、4時の相談終了の時間が過ぎても来られることがあり、お断りすることができないときもあります。少しメリハリをつけるようにするのですが、なかなか難しいところはありますね。

(渡部会長) ありがとうございます。山下先生、この議題でなにかございますか。

(山下副会長) 評価指票の選び方は少し考えなおした方がいいのではないかもしれないですね。今のお話でしたら、例えば評価するのは、アクションを起こしたことを評価するのか、そのアクションによってどういう効果が生まれたのか、いろんな視点があるのですが、例えば今でしたら時間外の対応がどうなってしまうのかというのも、実は大事なところで、そうなってくると、キャパシテ

ィが超過しているというのも繋がっていくと思いますので、評価指標については十分拝見できていないのですが、もしかしたら、違う評価指標が必要になってくるのではないかと思います。

(渡部会長) ありがとうございます。富岡先生，入江さんや進藤さんと相談していただいてキーパーソンとの繋がりをよろしくお願いします。

(富岡氏) 有難い話です。できるだけ，そういう意味での認知度は上げてもいいと思います。

(渡部会長) それでは，青少年問題協議会の今後の方向性についてお願いします。

(事務局花尾) 今後は，各事業計画の適切な進行管理を行うとともに，重点事業については個別の取り組みごとに各担当課の自己評価をお願いする予定になっています。評価資料のところでもでておりましたが，実は前の会から評価のお話はでておまして，できましたらどこかで議論できればと思っております。今後の青少年問題協議会は2回ほど予定しておりますが，新規事業の進捗状況や最後の方は各担当課の評価の検証と提言（6）も新たに追加されましたのでインターネット関係やいじめ・不登校についても議論ができればと思っております。こういう方向で，この一年間進めていこうと考えておりますのでよろしくお願いいたします。

最後に日程ですが，2回目は11月25日（水），3回目は令和3年2月3日（水）にこの教育委員会室で開催を予定しておりますので，よろしくお願いします。

(渡部会長) せっかくですので，新しい委員さん，今日の感想などお聞かせください。中野委員さん，お願いします。

(中野委員) 「アサガオ」という名前は知っていたのですが，今日はいろいろ富岡先生にお話をさせていただいて，重い内容の話があり，一人一人にかける時間やエネルギーがすごくいると思うのですが，「アサガオ」で相談をしているということだけで愛護委員をしても内容は知らなかったのですが，一生懸命取り組んでおられるお話を聞いて良かったと思います。一つだけお聞きしたいのですが，芦屋市以外の相談も受けられるということですが，その市の相談機関を紹介したりはしないのですか。芦屋市以外の方も相談に来られるととても大変なのではないかと思われるのですが。

(富岡氏) ご自分の市の相談機関に行かれた方が，芦屋市の「アサガオ」に来られる場合もあります。ご自分の市ではなかなか話を聞いてもらえなかったとかで来られます。私どもはできるだけご自分の市の相談機関を利用してもらいたいのですが，その時はお話の主訴を聴いた上で「その内容ならお住いの市に相談センターがありますよ」と必ずお教えします。ただ，ご自分の市の相談センターがあるのを知っていても来られた時は相談にのっております。

(渡部会長) どうも，ありがとうございました。では，進行を事務局にお返しします。

(事務局花尾) 渡部会長，進行ありがとうございました。それでは，閉会の挨拶を山下副会長，お願いします。

(山下副会長) 私自身、皆様のご意見を伺って本日はとても勉強になりました。ありがとうございます。コロナ禍で、中高生の心に影が落ちてしまっていて、他者との関係の取り方の部分で学校に行けなくなったり、少し難しい問題が起きていて、これから先もまだ出てくるのではないかと予想されています。この時代は、無理に明るくしなくても、暗い中で少し明かりをつけようかぐらいの、全体を明るくしなくてもいいというそんな時代になっていくのではないかと思います。その中で「アサガオ」の話を聞いて私も勉強になったのですが、では、“普通”ってなんだろう？ということがすごく問い直されていく時代になって、その中でこの青少年問題、青少年をどのように育成していくのが、非常に難しく、おそらく原点に戻るしかなくて一人一人を大事にしていくというか若者を若者ととらえて一人一人を大事にしていくという原点に戻りそれを市民の皆様一人一人に考えていただく以外ないと思います。例えばその時に市民の皆様が今日の例でしたら、どんな眼差しで不登校のお子さんをお持ちのご家庭をみておられるのでしょうか。「そんな、偏見を持っていないよ」と言われる方もおられるのですが、当のご家族の方は偏見を持って見られていると不安に思われるわけなので、なにかの形で偏見はもっていないと直接わかれるようにしていかないといけないのだと思いますが、その為にどのような形で市民の皆様、一人一人から口先だけでなく暖かい眼差しを向けていただけるかなということが、今まで以上に大事かもしれないと思っています。我々ができることは本当に限られているのですが、相談に来られた時は、一生懸命話し合うしかなくて、それを少しでもどこかで披露して結論や答えがでなくても、悩んでいる様子を共有していく、そこから簡単に答えがでて、「こうすれば、いいや」とか、「問題でない」というのを全体的に共有していけるという形しかないのかなという気がしました。この会の委員の方ばかりでしたら、もう少し子どもたちも楽に生きていけるのかなとお話を伺いながら思いました。それぞれの、お立場でお話を伺いましたが、具体的な話の中に真実が宿っているかもしれないのです。本日は全体的なお話でしたが、これからは是非、可能な範囲で具体的なケースについても教えていただきたいです。くれぐれも、富岡先生ご無理をなさらないでください。ありがとうございました。

(事務局花尾) 山下副会長、どうもありがとうございました。本日は、皆様の活発なご意見のおかげで有意義な会議となりました。長時間、誠にありがとうございました。これにて、第1回芦屋市青少年問題協議会を終了いたします。